

幼稚園を實證するもの

(時　　言)

幼稚園を實證するものは、一つ一つの幼稚園、一人一人の先生である。意見は主張する、理論は論ずる、制度はきだめる。しかも、幼稚園とはこういうものだと實證し、幼兒保育はこういうことだと實證するのは實際だけである。普及の宣傳も必要だ。運動も大切だ。しかし、ほんとうの幼稚園とは此の通りだと示すことの出来る幼稚園、成る程これが幼兒保育者かと感じさせることの出来る先生によつてこそ、幼稚園が認識せられ、幼兒教育が理解せられるのである。

理想の幼稚園、理想の先生と、理想という言葉が、そうやすやすと使えるものではない。また、そららくらくと使おうとは決して思わない。たゞ、我が子に對する眞の親心の中心に觸れるもの、それを満足させるに足るものでなければならぬ。親の要求にも、その生活その文化の程度によつていろいろの差はあるかも知れないが、親心の眞純と尊貴に變りはない。それは、必ず深いところで我が子の教育を求めているものであり、こまやかに我が子の幸福を希つているものである。その親心を實際に充たすことなしには、幼稚園も幼兒保育も、眞實に親の心に實證せられない。一人一人の親心に實證せられることなくして、幼稚園と幼兒保育の社會的實證は成立しない。

あ、いう幼稚園が我が町にもほしい。あ、いう先生に我が村の子も保育して貰いたい。

い。——更に、あ、いう幼稚園を是非つくりたい、あ、いう先生に是非なりたい。こういう順序で、幼稚園と幼兒保育が、町から町へ、村から村へ、どこの町へも、どこの村へも傳わつてゆくのである。社會に普及してゆくのである。

この意味で、今ある一つ一つの幼稚園、今働いている一人一人の先生こそが、幼稚園と幼兒保育の發展の中核であり原體である。その中核と原體とが充實していないでは、恐らく眞の理解と認識を社會に實證的に力づよく確立させることは、むつかしいであろう。

これは、あまりいゝ言葉ではないようでもあるが、たいらに見本といつてもいゝかも知れない。一つ一つの幼稚園、一人一人の先生が、見本のために存在しているので決してないことは勿論である。その嚴肅な存在を見本などいるのは全く當らない。しかし、それは、おのずから、よい見本とならずにはいないのである。

わが國の幼稚園と幼兒保育との現狀は、こうしたよい見本が必要なのではあるまい。その見本による實證が足りないがために、社會の關心と熱意とが、社會に強く廣く生起し燃え上つて來ない、少くも一つの理由になつてゐるのでなかろうか。

これはわれわれ自身としての苦しい反省であるが、幼稚園義務制實現の大きい勢力の中の一つの責任割り當てでもある。